The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	接続詞と時制の相互作用について : BEFORE節中の過去形と過去完了の交替の場合
Author(s)	田村, 幸誠
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1999, 33, p. 41-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

接続詞と時制の相互作用について：BEFORE 節中の過去形と過去完了の交替の場合*

田 村 幸 誠

1．序

本論文では、接続詞と時制が相互作用する現象の中から before 節中の過去形と過去完了の交替の問題を取り上げ、それがどのような意味的差異から生じてくるものかを議論していく。

通常、英語では事態間の時間的前後関係を明確にする手段として after、when などの接続詞による方法と時制による方法との 2 つに大別される。

(1) I saw him *after* he saw me.

(2) He *said* he *had spilt* some milk on the tablecloth.

(1) では、接続詞 after によって、そして (2) では補文に過去完了構文 (had + past participle) を用いることで、補文の事態が、主文の事態よりも先に起こったことが明示されている。このことから予測される帰結として、接続詞と時制による時間関係の指定が同一文中で一致しない場合、容認不可能な文が得られるはずである。

(3) * I had seen him after he saw me.

実際、(3) は、after による時間関係の指定と過去／過去完了という時制による時間関係の指定が不一致を起こしているために容認不可能であるとされる。では、次の (4) はどうであろうか。

(4) John came here before Bob had arrived.

接続詞 before は主節が従属節よりも先に起こったことを示す一方で、時制の関係からみると従属節で過去完了が用いられているため、主節は従属節より後に起こったことを示してしまう。従って、(3) と同じ論理で (4) は容認不可能な文となるはずである。しかし、(4) は、全く問題のない文であると母語話者によって判断される。さらに、(4) の特徴として、before 節の過去完了 (had arrived) を過去 (arrived) に代えても容認性に問題はなく、その際に事態間の順序 (“came” < “arrive”) にも変化はあらわれない。では、一見、非論理的にみえる before 節の過去完了は一体、どのような意味的特性を記号化しているのだろうか。そして、過去／過去完了の交替現象はどのような意味的差異に対して起こっているのであろうか。

2．先行研究とその問題点

ここでは、先行研究として before 節の過去完了の取り扱いに対して対照的なアプローチを取っている Declerck (1979) と松村 (1989) を取り上げ、両分析の問題点を指摘したい。

2.1 Declerck (1979)

Declerck は、過去完了構文が通常の過去完了の意味機能に加えて、as if、wish、suppose などの補文中では「仮定法」[1] としての機能も持っているという事実に注目し、その上で、before 節の過去完了構文が後者の働きを具現化したものであると主張する。それにより、1 節でみた接続詞 before と過去完了の不一致の問題を解決しようとする。

(5) a. John dived into the swimming pool before Mary put

water in it.

b. John dived into the swimming pool before Mary had put water in it.

(Declerck 1979: 728)

(5a) と (5b) の意味の違いは、前者が「(John がプールに飛び込んだ後に) Mary は、水を入れた」という読みが通常含意されるのに対して、過去完了が使われた後者は、「水を入れなかった」という読みが可能であることである。この過去形と過去完了の意味の差異が Declerck に before 節の過去完了が仮定法的意味を担うものであると分類させた最も大きな原因であると考えられる。

before 節の過去完了を仮定法と分類することの問題点として次のことがあげられる。まず第一に、Declerck 自身が述べているように、過去完了が用いられた (5b) において、(5a) と同様に「水を入れた」という before 節の事態を事実として読むことも一方で可能であることがあげられる。このことは、as if や wish の補文の過去完了が常に反事実を表すことと比べるとかなり様相が異なる。つまり、(5a) と (5b) の違いにおいて実際に問題となってくるのは、反事実性ではなく、事実か非事実かに関してどちらでも解釈可能な曖昧性が過去完了を用いることで生じてくることなのである。例えば、(6a) の状況で、本当に話者が「Bill が撃たなかった」という反事実の意味を伝えたい場合は、before 節には過去完了ではなく、(6b) のように反事実性を積極的に表す法助動詞の could が用いられる。

(6) a. I shot Bill before he shot me.

b. I shot Bill before he could shoot me.

第二の問題点として、before 節に過去形を用いた場合でも反事実を表

すことが (7) のように可能であり、一方 (8) に示したように過去完了を用いた場合でも明確な事実を表すことが可能である。

(7) a. John died before he wrote a will.
b. The seeds rotted before they germinated.

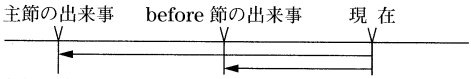
(8) Kyoko Iwasaki won a gold medal at the Olympic Games before she had graduated from junior high school in 1993.

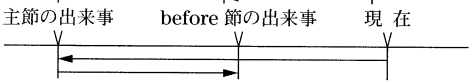
以上のことから、before 節の表す反事実性と過去完了構文の表す事実に関する曖昧性の問題を混同することなく、適切に区別して考え、その上でそれぞれがどのようなメカニズムのもとに生成されているのかを考え直す必要があることがわかる。

2.2 松村 (1989)

松村は、Declerk (1979) の before 節の過去完了が仮定法的意味を表すということに反論し、その一見非論理的にみえる before と過去完了による時間関係の不一致の現象は、過去完了構文が内在的にもつ2つの側面、つまり、(i) 時制的特性として喚起される reference point と (ii) アスペクト的特性として生じる「完了」という2点から説明できると主張する。

具体的には (5a)、(5b) に示したような before 節の過去と過去完了の意味の違いは、(9)、(10) にそれぞれ示した視点の取り方の違いからくると松村は主張する。

(9)


(10)


(松村 1989: 127)

この分析の特徴は、(9) の before 節が過去形の場合、現在から直接その事態が捉えられるのに対して、(10) の reference point を喚起する過去完了の場合、reference point が主節の事態時に置かれ、そこから時間的に後続する before の事態が捉えられているとする点である。

松村の過去完了構文がもつ時制とアスペクトという 2 つの特性に注目したことは特筆すべきことであるが、(10) における過去完了の reference point の取り方は一般的な完了構文の reference point の取り方と全く正反対であることに問題が残る。*John had already eaten dinner.* あるいは、*John has eaten dinner.* にみられるように 現在／過去完了を問わず、「完了」は、reference point に対して過去（それより時間的に前）に事態時を取るのが特徴である。 従って、(10) にあるように、before の事態時に先行してその過去完了の reference point を主節時（主節(E)）に取るというのは、before の接続詞と時制の表面的な不一致現象を処理するために持ち出されたものであると考えざるをえない。

さらに、この松村の視点の取り方は、完了形のアスペクトの分析と組み合わさると大きな欠点を持つと考えられる。

(11) He came before I had written a letter.

(12) He came before I wrote a letter.

松村は、完了形のアスペクトの特性として (11) は、(12) に比べて完了形であるため事態の終点に重点がおかれ、従来の「完了 (perfect)」の意味がそのまま観察できるとしている。

この事実観察は妥当なものであるが、この分析は、理論的に、上の(10)と矛盾を起こしていると考えられる。つまり、完了形構文が外的な reference point を必要とすることの根本的理由とうまく噛み合わないからである。事態を「完了」的と認識するためには、起こった事態より時間

的に後に reference point をおいて、そこから事態を捉える必要がある。それ故、(10) の before 節の過去完了のスキーマに示されたように、過去完了の reference point がその事態よりも前に置かれる場合、基本的には、動詞の原形により表される完結相 (perfective) の認識は可能であるが、完了 (perfect) の認識は不可能であることになる。[2] 言い換えると、だからこそ、完了構文の reference point は、常に、事態より時間的に後に置かれることがこれまで多くの文法書で指摘されてきたのである (cf. Greenbaum and Quirk (1990), Comrie (1985))。

以下では、before 節、 過去時制、そして、過去完了構文の基本的な意味から考え直すことで上記の問題点が解決できることを示したい。特に、過去完了構文の reference point が事実の曖昧性の伝達に関して過去時制との対立で非常に重要な機能を担っていることをみる。

3. 分析

3.1 before 節の基本的意味特徴

まず、before と同じように事態間の時間的前後関係を表す after と比較することで before の基本的意味特徴を明らかにしたい。

Talmy (1978) によれば、従属節は図 (figure) である主節を位置付けるための地 (ground) の働きをする。つまり、主節を位置付ける（あるいは、同定する）ための参照点 (reference point) となっていると彼は主張する。

(13) a. Tom died after he wrote a will.
b. * Tom wrote a will after he died.

(14) a. Tom wrote a will before he died.
b. Tom died before he wrote a will.

Talmy に従って、上の after と before の非対称性を分析すると従属節（地）に対して生起できる主節の事態（図）に関する制約として次のことがいえる。まず、after は、時間の流れ（あるいは因果関係）に沿った prospective な継起関係による主節の位置付けを行うといえる。それゆえ主節事態が起こる際に、時間的に先行する事態である after 節の結果状態が地として含意されている必要がある。この意味的特徴から、その結果状態と意味的に整合性をもたない主節事態は (13b) のように論理的な矛盾が生じ、排除されることになる。一方、before は時間の流れ（因果関係）と逆行する retrospective な継起関係による主節の位置付けを行っている。従って、before には after のような制約はなく before の事態を P とすると主節の事態には、not-P でさえあれば、どのようなものでも位置付けることができるのである。この before にみられる図に対する地の制約は after の「従属節の結果が含意されるべき」という制約に比べてかなり緩やかな制約であり、それ故、(14b) のように、因果関係の流れからは、起こり得ない事態も地、つまり参照点として働くことができるのである。

このことを踏まえて、以下の文をみてみよう。

(15) a. The seeds rotted before they (had) germinated.
b. The progress is good, since the doctors removed the tumor before it (had) spread too far.
c. I managed to cover up the embezzlement before the accountants (had) discovered it.

(15) において、事実性の観点からは、before 節の事態は過去／過去完了のどちらが使われた場合でも反事実とみなされる。この反事実性は A before B によって表された事態を因果関係に従って捉え直した結果、before 節の事態が起こっていないという判断により生じたものである

(この現象は、因果関係と平行して主節を捉える after では起こり得ない)。以上のことから、before 節に生じる反事実の（仮定法的）ニュアンスは、時制や過去完了とは関係のないレベル、接続詞 before の主節（図）と従属節（地）の組み合わせにより生じている特徴であることを主張しておきたい。

3.2 before 節中の過去と過去完了の交替について

3.2.1

以下ではまず、A before B で、前節の (15) と異なり因果関係から反事実と断定できないタイプの文にみられる過去形と過去完了の違いからみていくことにする。

(16) a. John dived into the swimming pool before Mary put water in it.

b. John dived into the swimming pool before Mary had put water in it.

(= (5) Declerck 1979: 728)

(17) a. John finished his last novel before he died.

b. John finished his last novel before he had died.

(18) a. Tony bought gardening tools before he built a house.

b. Tony bought gardening tools before he had built a house.

(16) から (18) の before 節では、(a) では過去形が、(b) では過去完了が用いられている。両者が上記のように最小対立として提示された場合の最も大きな意味的差異は、次のことにある。まず、(i) before 節に過去形が

用いられた場合は、通常、その事態が事実として生じたことを含意する。一方で、(ii) before 節に過去完了が使われた場合、事態が起こったかどうかについての事実性に曖昧さが生じる。例えば、(17b) では、(17a) との対比で、「John が死んでいない」という解釈の可能性が強く生じる。(18b) では (18a) と異なり、「Tony は、まだ家を持っていない」という可能性がある。

以下では、このように、実際の事態生起を保証する過去形と、それに対して、曖昧性を留保する過去完了の違いがどのような要因に基づくものであるかを考えていく。

3. 2. 2 Before 節中の過去時制の働き

(16) から (18) において、before 節に過去形が使われた場合、事実を含意するというのは一見もっともなことであるが、改めて、その意味をここでは考えてみたい。

Langacker (1991: Ch. 6) は、過去時制(-ed) のプロトタイプ的な意味は、事実としての過去の認識にあるとしている。また、McCawley (1973:269) は、過去形にはすでに文脈に登場した anaphoric な性質が内在しているとしている。従って、McCawley によれば、(19) は文脈上、過去時制が指し示す時間 (antecedent) が与えられていない限り奇妙な文になるとしている。

(19) * The farmer killed the duckling. (McCawley 1973: 269)
(cf. The farmer killed the duckling *at seven*)

過去時制のこの基本的特徴を名詞句における定／不定冠詞の機能と平行して考えてみよう。過去時制の機能は定冠詞 the と同様に、事態を definite なかたちで捉えていることを表すマーカーであるといえる。このことは、

事態が明確に特定可能であるということを意味し、時間軸上に明確な位置をもつ（あるいは位置を占める）ということである。それ故、(16a)、(17a)、(18a) のように、話者が、before 節の事態を事実として生じたものとして伝える場合には、過去形が用いられるのは当然の帰結である。[3)]

3. 2. 3 Before 節中の過去完了形構文の働き

次に、(16b)、(17b)、(18b) の過去完了が使われた場合を考えてみよう。3.2.2 の場合と同様に、過去完了そのものの性質から考えていく。

(20) I had taken a sleeping pill at seven.

(i) 「7 時にもう薬を飲んでいた」["At seven" refers to a reference point.]

(ii) 「7 時に薬を飲んだ」["At seven" refers to the event time.]

よく知られているように、(20) には (i) と (ii) の 2 つの読みが存在する。前者は「過去の現在完了 (perfect-in-the-past) 」とよばれるもので、後者は「大過去 (past-in-the-past) 」といわれるものである (cf. Comrie 1976: 78)。(i) では、過去完了の reference point が at seven で特定化されており、前節の議論からすると definite に捉えられているといえる。一方、(ii) の場合 at seven は事態時を指定しており、reference point は、指定されていない。別の言い方をすれば、時間軸上に、明確な位置を占めない indefinite な指定が与えられている。もちろん、文脈上 definite な指定を受ける可能性もある。しかし、ここでのポイントは過去の事態を捉える際に用いられる過去完了の reference point に対して indefinite な指定が可能であるということである。

では、before 節の過去完了の場合、reference point は、どのように

指定されるのであろうか。

(21) a. Kyoko Iwasaki won a gold medal at the Olympic Games before she had graduated from junior high school {*by 1993/ in 1993}.

b. John came here before Bob had arrived {*by six / at six}.

(21) の例から、before 節内の過去完了構文の特徴として、reference point が特定時間を表す副詞によって修飾されないという言語事実が得られる。つまり、独立文で用いられた場合と異なり、reference point は、常に、時間軸上に明確な位置をもたない indefinite な指定を受ける必要がある。

このことを踏まえて、基本に立ち戻り、そもそも、before 節に過去完了形構文が使われた場合、主節の事態は before 節のどのような基準点との対比によって位置付けられているのかを考え直す必要がある。中右 (1994) や Langacker (1991) の考え方に従うと、完了形構文の reference point を取るという特徴は "have" の意味の具現化によるものであるとされている。さらに、両者共に、完了形構文が have と past participle という 2 つの動詞からなる複合的事態を表していると考え、その上で完了形構文の主要部は have であるとみなしている。このことから主張できることとして、before 節に過去完了形構文が用いられた場合、before によって直接時間的関係が比べられているのは、主節の事態と have の表す reference point であるということがいえる。つまり、ここで行われている時間的対比は、過去形の場合とは異なり、過去分詞によって表された具体的な事態と主節との直接対比ではない、ということに注目する必要がある。

以上のことから、(16)—(18) の before 節の過去完了構文が過去形と

は違い、なぜ曖昧性を示すのかが明確になった。それはこの構文が indefinite な reference point を取ることに起因するのである。過去形との対立がここでは重要である。英語においては、過去形は definite な事実の認識に通常使われる。すなわち、過去形の基本的意味は事実性の曖昧さを表すのには適さない。そのため、曖昧性を表現する別の手段が必要になる。indefinite という特徴を有する過去完了は、その曖昧さを表すための表現形態として用いられる動機が存在するのである。

この過去完了構文の意味的特徴を Langacker (1991) の認知文法の基本的枠組みに従いモデル化すると、以下のようになる。

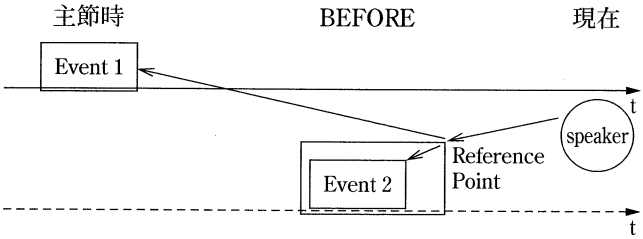


図 1

(矢印は話者 (speaker) の視点を表している。また、before 節の事態の複合性は have の表す reference point 内に過去完了によって表される事態 (Event 2) を内包することで表されている)。

ここでのポイントは、before 節の had が表す reference point が二重の機能を担っているということである。一つは、before 節において過去分詞によって表された事態のアスペクト的「完了」を捉えるという節 (clausal) レベルでの働きである。そして、もう一方は、主節との時間的前後関係の対比に使われる二節間 (inter-clausal) レベルの働きである。このように、before 節の reference point が二重機能を果たすということに注目することで、はじめて、before 節の過去完了形構文が「完了」

という本来の機能を果たす一方で、時制との関係で曖昧性を伝達するという before 節の過去完了構文の二面的機能を適切に捉えることが可能になるのである。

このような考えを取ることで残された問題を解決することができる。まず、第一に 3.1 でみたように因果関係から before 節の事態の反事実性が明らかな場合は、過去形であっても事態そのものは時間軸上に特定化されないので、definiteness/ indefiniteness の対立は中和され、結果として、アスペクトの差異のみが両者の違いとして際立つことになる。

(22) a. The seeds rotted before they (had) germinated.
b. The progress is good, since the doctors removed the tumor before it (had) spread too far.
c. I managed to cover up the embezzlement before the accountants (had) discovered it. (=(15))

例えば、(22a) では、「発芽しかかっているのに腐ってしまった」というニュアンスを表す時、before 節に過去完了が用いられ、一方、そういうアスペクト的側面に考慮することなく単に「発芽する前に腐った」という場合は過去形が用いられることになる。

次に、どのような理由で、before 節の過去完了には状態動詞が生じ得ないかということである。

(23) a. They closed the door before I was in.
b. * They closed the door before I had been in.
(松村1989: 131)

(23b) は一般的な完了の考え方に従えば、「継続」の意味であるから、完了とみなされるべき事態の「終点」が特定できない。そのため、

reference point から事態終点の同定が不可能であり、(23b) が容認不可能であることが導かれる。これは、未来の場合に、状態の完了が生じないのと同じことである。

(24) a. Mary will close the door before I am in.
b. * Mary will close the door before I have been in.
(松村1989: 131)

独立文で「状態」の現在完了が起こり得るのは、その本来的意味として、現在時が事態の一時的終点という解釈が行われるためである。

4. 結論

従来の before 節中の過去／過去完了の意味的差異に関する研究は、Declerck (1979) に代表されるように反事実性に関する交替であるということがいわれてきた。本論文では、本当の意味で、非現実的であると保証できるのは、過去／過去完了の交替ではなく従属節の事態と主節の事態が因果関係上成立しえない場合であると指摘した。一見矛盾する事態関係を after と異なり before が成立させられるのは内在的に時間の流れと逆行する retrospective な図と地の処理のためであると主張した。

before 節に過去形が使われた場合、通常、事実として生起したものとして理解される。これは、過去形によるプロトタイプ的な definite な事態の捉えられ方の現れであるとした。その一方で、過去完了の場合、その reference point が時間的に特定されないという特徴から indefinite な捉えられ方がなされているという結論を導いた。その特徴が事実の曖昧性を過去形との対比で表現する手段として利用されていると結論づけた。

本稿での分析は、さらに、認知言語学の中でどのように扱われるかを示す必要性があると考えられる。その点は田村 (1999) を参照されたい。

Notes

* 本稿執筆にあたり河上誓作先生、大庭幸男先生から多くの助言をいただいた。また、インフォーマントとして、Michael T. Wescoat 先生、Anthony Hibberd 氏に御協力いただいた。記して心から感謝申し上げたい。

1) Declerck は、この過去完了を法的使用 (modal use) とし、それが実質上 subjunctive mood と同義であるとしている。故に、本文中では「仮定法」という訳語を与えた。
2) Comrie (1985) は、英語の過去完了形構文が retrospective な視点を取っているとしている。
3) 過去の事態を indefinite な形で伝える一つの手段として、"The farmer has killed the duckling." というように現在完了を用いることがあげられる。(cf. Leech 1987: Ch. 2)

References

Comrie, B. (1976) *Aspect.* Cambridge University Press, Cambridge.

Comrie, B. (1985) *Tense.* Cambridge University Press, Cambridge.

Declerck, R. (1979) "Tense and Modality in English *Before* Clauses," *English Studies* 60, 720-44.

Greenbaum, S. and R. Quirk (1990) *A Student Grammar of the English Language*, Longman, London.

Langacker,R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* vol. 2: *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.

Leech, G. (1987) *Meaning and the English Verbs*, Longman, London.

松村瑞子 (1989) 「非論理的過去完了形」『英語学の視点』(大江三郎先生追悼論文集編集委員会編) 九州大学出版会, 福岡.

McCawley, J. (1973) *Grammar and Meaning: Papers on Syntactic and Semantic Topics*, Taisyukan, Tokyo.

中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館, 東京.

Talmy, L. (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences," *Universals in Human Language*, vol. 4, eds. by Joseph H. Greenberg et al, 625N-49, Stanford University Press, Stanford.

田村幸誠 (1999) 「接続詞 Before と時制の相互作用について」日本英語学会研究発表原稿 (於成蹊大学).

(大学院後期課程学生)